「叶えられた悪夢　～少女願望の果て～」

（体験版）

目次

序章　叶えられぬ夢想
第一章　欲望の暴かれた一夜
第二章　衆目に晒された痴態
第三章　禁断の狂おしき官能
第四章　愛執に壊された日常
終章　叶えられた悪夢

登場人物

潮崎　湊（しおざき　みなと）……大学二年生の男子。
佐倉　春陽（さくら　はるひ）……大学二年生の女子。
坂本　弘子（さかもと　ひろこ）……大学二年生の女子。

序章　叶えられぬ夢想

「ただいまー……」
潮崎湊はアパートの玄関を開け、真っ暗な室内に向かって声をかけた。
返事はない。ただ無慈悲な残響だけが、虚ろなワンルームにこだました。
（……って、誰もいるわけがないか）
都内の大学に入り、一人暮らしを始めて一年ちょっと。習性とは怖いもので、帰って来ても家に誰もいない状況が、まだ染みついていない。
（そろそろ一人暮らしにも慣れないとなぁ）
苦笑しながら、手探りで廊下の明かりを点けた。後ろ手に鍵とチェーンをかけてから、靴を脱ぎ、廊下を通って奥の部屋に入った。
「はぁ、疲れた」
湊の暮らしている部屋は、どこにでもありそうな学生向けのワンルームだ。家具と言えば備え付けのデスクと本棚、それだけは妙に綺麗なクローゼット。ちょっと激しくセックスしたら壊れそうな安手のベッドと、小さなちゃぶ台。
いかにも男子学生の一人暮らしという感じの殺風景な部屋ではあったが、床にゴミが散らばっているということはなく、比較的清潔に保たれていた。
湊は、弁当の入った袋をテーブルの上に置くと、重いショルダーバッグとコートを、壁のフックに引っ掛けた。
「はぁー……」
肺の空気をすべて吐き出すような溜息をついて、ベッドに仰向けに寝転がる。シャツがしわになることなど、まるで気にしていなかった。
しばらくそうして天井を見上げていたが、ふと思い出したように首だけを動かして、部屋の隅にあるクローゼットを見る。
（どうしよう。今日は特にやることもないし）
（あれをする時間は、充分にあるんだよな……）
しばらく、湊は逡巡した。しかしすぐ、
（……よし、やろう）
ひょいと起き上がり、クローゼットに近づく。
一番下の引き出しに手をかけたところで、誰かの視線を感じたように周囲を見回す。むろん、一人暮らしのこの部屋に、誰もいるはずはない。それでも湊は気になるようで、ベランダに続く窓のカーテンをきっちり閉め、玄関の鍵とチェーンを確認した。
「うん、大丈夫」
不安を振り払うように声に出して言うと、ようやく安心して、クローゼットの下の引き出しを開けた。

その途端、パステルカラーの花が咲いた。

引き出しの中に詰まっていたのは、ピンクや黄色や水色の、可愛らしい色合いの衣類であった。色だけではない。フリルやレース、リボンや刺繍など、とても男物の服ではありえない装飾が施されている。

袖口がすぼまった、レモンイエローのリボンプリントチュニック。

青いデニムがおしゃまな印象のジャンパースカート。

オレンジ色のチェックがフレッシュな、襟付きのカントリー調ワンピース。

どれもこれも、少女用にデザインされた女児服ばかりであった。それもパンツの類は、キュロットやスパッツのようなものさえない。スカートやワンピース、ただし、サイズはかなり大きい。細身で小柄な少年であれば、充分に着られるサイズであった。

そう――ちょうどその服を見ている湊なら。

（どれにしようかな……）

湊は丁寧な手つきで、引き出しの中を探り始めた。

やがて取り出したのは、ふりふりの襟にサクランボの飾りがついた、レモン色のブラウスだった。いまどきこんなブラウスを着ている少女など、まずいないだろうと思われるようなデザインだ。

（これ……どうしよう。いろいろ買った中でも特に可愛いブラウスだから、恥ずかしくて、まだ袖を通してないんだよね）

（今日、着ようかな……）

そのブラウスを着ているところを想像して、湊は背筋を震わせた。

（着てみたい）

（でも、恥ずかしい）

二つの感情がないまぜになり、おずおずと襟の部分をつまんでみる。縁取りのフリルが手のひらに当たってくすぐったい。

（これに合わせるとしたら――）

湊は再び、大きく開いた引き出しを見る。

（チュチュスカートじゃちょっと軽すぎるな。色の濃い普通のスカートか、あるいはジャンパースカート……）

何着かあるジャンパースカートの中から、湊は濃いピンクのものを取り出した。幅の広い肩紐と胸の部分が金具でつながっている、古典的なデザインのものだ。ブラウスと合わせると、何となく昭和っぽい。

（（これを着たら、どんな気持ちだろう……）

想像するだけで、胸が高鳴る。その鼓動が背筋を伝わって、太腿の間に伝染する。

「んっ……」

ズボンの中で、ペニスがむくむくと大きくなる。
肌寒いはずの室内なのに、体がじわじわと熱を帯び、肌がうっすらと汗ばんでくる。その熱をこらえきれなくなったように、湊は服を脱ぎ始めた。体毛の薄いほっそりとした肢体が、薄明のもとにさらけ出される。
股間に生えているものと、胸が全く膨らんでいないことを除けば、湊の体つきは少女のようであった。蝋のように白く滑らかな肌、無駄な肉のついていない、それでいて骨ばっていない体つきは、同年代の少女がうらやみそうなほどだ。
服を身に着ける前に、引出しの中から下着を取り出した。少女向けのゴム入りコットンショーツと、おそろいのキャミソール。色柄はピンクで、フロントには小さなリボン、バックには可愛らしいお姫様のイラストがプリントされているものだった。
「はぁ……」
いそいそと身に着け終えると、湊は熱っぽいため息をついた。
いくら小柄とはいえ、二〇歳の男性である。少女のために作られた肌着はやや小さく、ショーツのゴムが内ももを締め付け、キャミソールはぴっちりと肌にまといつく。
そうして少女のような肌着を身につけていると、まるでまだ胸も膨らんでいない少女になってしまったかのような錯覚に陥る。ただ股間に強張っている膨らみだけが、少年であることを主張していた。
こらえきれず、湊はそのふくらみを指の腹で擦る。とたんに、電撃にも似た刺激が背筋から脳髄まで駆け上がって、快楽の先走りが漏出する。湊は思わず、女のようにかすれた悲鳴を上げた。
「ん、くぅっ……」
声が漏れないように、唇を引き締める。

――湊がこの趣味に目覚めたのは、高校生の時だった。

文化祭で女装することになり、湊も女子制服を借りて着たのだ。ブラウスと、リボン。チェックのプリーツスカート。さらに面白がった女子から、髪型を整えたり化粧をしたりされたため、湊は自分でもびっくりするほど可愛くなってしまった。
それからというもの、湊は秘かに女装に対して憧れを抱くようになった。
女装関連の漫画や小説を読んだり、インターネットで女装関連の画像や動画、フリー小説などを探したりして、様々なジャンルに触れていった。
女装オナニー。
女装セックス。
トランスセクシュアル。
そうした「女装」「女体化」さらに近年擡頭著しい「男の娘」などの作品群に触れる中で、湊はある特定のジャンルに、次第に傾倒していくようになる。

少女服での女装。
成人男性が、レディースでも、ティーンズですらなく、ガールズ用の服を着る。そんな倒錯的な世界に、湊はすっかり夢中になってしまったのだ。
それでも実家にいるうちは、服を隠しておく場所もないし、着られる時間だってない。高校生の間は、部屋に鍵をかけてネットでお気に入りの作品を巡ったり、通販サイトを見たりしては、妄想でオナニーをするだけだった。
だが大学生になって実家を離れれば、誰に気兼ねする必要もない。
通販を利用して、湊はガールズの洋服を少しずつ揃えていった。最近では発育の良い少女向けに一六〇サイズまでそろえているところもあり、一六三センチの湊が着られる服を用意するのは、それほど難しいことではなかった。
軽い興味で始めた女装だったが、その沼は、湊が思っていた以上に深かった。
最初はブラウスやスカート、ワンピース。
次に靴下、下着、アクセサリーや、バッグの類――
買えば買うほど、新しく欲しくなる。可愛いデザインの服や雑貨を見れば、ついつい手が伸びてしまう。そうしているうちになけなしのバイト代はほとんどが服に消え、気付けばクローゼットいっぱいに、服が貯まっているのだった。
湊はソックスを取り出して、両足につける。ふんわりした履き心地と、足首をくすぐるレースの感触がますます昂奮を高めてゆく。
続いて、レモン・イエローのブラウスだ。ボタンを外し、無我夢中でそれを羽織った。襟元からボタンを留めてゆく。
「は……ぁっ」
深い深いため息を、体内に溜まった熱ごと吐き出す。
「は、恥ずかしい……男子大学生なのに、こんなものを、着て……」
口に出すと、余計に恥ずかしい。ペニスがますますむずがゆくなり、今すぐそれを取り出して、力いっぱいこすり上げたいのをこらえなければならなかった。
「もしも――」
ふいに、おぞましく甘美な想像が湊の脳裏に広がった。
「こんな服を着てるところを、他の人に見られたら――」
考えた瞬間、寒気にも似た昂奮が走った。
「可愛いワンピースやスカートを着て、人のたくさんいる場所を歩いたら――」
例えば、駅前の雑踏。大勢の人に見られることを思うと、全身がむずむずと熱くなってくる。
「大学の友達とか、先輩とかに、こんな服を着る趣味があるだなんて知られたら……んっ！？」
ふいに、ずきっと痛みが走る。
湊は、自分の股間を見下ろした。

レモンイエローのブラウスの裾から覗く、お姫様プリントの下着。そこについているシミが、先ほどよりも少し広がっている。
こらえきれずに指で抑えようとすると、そのふくらみが、ショーツの中で窮屈そうに暴れた。
「……ぃっ」
せり上がってくる喘ぎ声を、湊は喉の奥にかみ殺す。膝に力が入らず、、今にも崩れ落ちそうだった。
（早くスカートを穿かないと、このまま出しちゃいそう……）
湊は慌てて、ピンクのジャンパースカートを拾い上げた。
頭からすっぽりとかぶるように着て、ブラウスの襟を整える。
「はぁっ、はぁっ……」
欲望に突き動かされるように、湊は引出しの隅に置いてある小箱を開けた。
中にはヘアゴムやコーム、カチューシャなどのヘアアクセサリーが詰め込まれている。いずれもイチゴやサクランボ、リボンやチューリップなど、少女趣味なものばかりだった。
そこから、大きな黄色いリボンがついたヘアゴムを取り出して、男子としてはやや長い――それでもヘアゴムで結ぶには短い髪を、無理やり括る。
「あ……」
湊は、顔を上げた。
目の前には、ぴったりと閉じたクローゼットの扉がある。開けると、中には男物の服がそこそこ入っていた。
だが、湊が彼が見ているのはそこではない。
観音開きの扉の内側に設置された、大きな姿見。
そこに映っていたのは、レトロな女児服を着た自分の姿であった。
丈の短いジャンパースカートの裾からは太腿が伸び、胸についているハートのアップリケがいかにも少女趣味だ。古典的な肩紐を引っかけるタイプで、首元にはレモン・イエローのふりふり襟がついたブラウスが覗き、袖口は手首のところできゅっとすぼまって、両手を可愛らしく包んでいる。
首から下だけではない。髪の毛も、やや短めとはいえ少女めいていたし、顔立ちも、年頃の少女がうらやみそうなほどに整い、化粧ひとつしていないのに十分美少女と呼んでよいほどだった。
湊は視線を少し下げ、鏡に映る自分の下腹部を見た。
少女色をしたジャンパースカートの前に、奇妙な突起が生まれている。
「ぼ、勃起してる……ぼく、可愛いお洋服で興奮しちゃってる……」
声がうわずる。
この部屋の隣にはだれも住んでいないためある程度声を出しても大丈夫なのだが、仮に住んでいたとしても、聞かれるかもしれないという危惧など頭の中から消し飛んでいたこ

とだろう。
「は、恥ずかしい……」
口では言いながらも、湊はジャンパースカートの裾をつまみ、ゆっくりと持ち上げる。ただでさえ露出過多な太腿が、さらに根元近くまで晒し出される。
そしてついに、太腿の間に、逆三角形のピンク色が覗いた。
「うっ……」
恥ずかしさにもじもじしながらも、手は止まらない。スカートの裾を一辺とするトライアングルは、次第に大きくなってゆく。その形状は、少女にはあるまじき器官によって盛り上がり、おへそまわりのゴムが浮き上がっているほどだった。
（しこしこ、したい）
（ショーツの中で膨らんでいるおちんちんをこすって、気持ちよくなりたい）
湊は左手でスカートの裾を胸元に押さえ、右手をショーツに宛がった。へその下と手のひらの間で、ごりっ、ごりっと硬い肉棒を転がす。
「あっ、ぐぅっ、うっ……」
乱暴な刺激に、膝が震える。竿の部分ももちろんだが、特に亀頭を掌底に押さえこんでやると、腰の奥から劣情が湧き上がるのだ。ショーツのしみが、じわじわと広がった。
「うっ、うぁっ……」
湊は乱暴に、右手でショーツをずり下ろした。
途端に、これまでコットンの布に閉じ込められていた暴れ馬が飛び出す。反動で激しく上下に揺れ、やがて動きが止まると、床と水平になるほどそそり立った。
大きさとしてはそれほどでもない。むしろ、日本人男性としては小さい部類だろう。しかし血管の浮き出た竿は痛々しいほどに硬く勃起し、包皮から顔を出した亀頭は爛熟した果実のように紅く、艶やかに膨らんでいた。
湊はそれを、力任せに掴む。手のひらを火傷しそうなほどに熱を帯びたおのれの化身を、痛いくらい乱暴にこすり上げた。
「はぁっ、はぁっ……」
湊は熱っぽい目で、正面を見た。
そこには、レトロな服装を着た少女の姿が映っている。頭のヘアゴムから足元のレースソックスまで、少女としか思えない格好だ。
ただその左手はジャンパースカートの前を大きくめくりあげ、ブラウスの裾から覗く下腹部には、猛々しい男性の象徴が屹立している。玉袋には、ピンクのコットンショーツが引っ掛かっていた。
（は、恥ずかしいっ……！）
羞恥に、肉棒を握る手に力が入る――その途端、殻を破るようにして亀頭が飛び出し、鈴口からじわりと透明な液体が漏れ出した。
「だめっ、出るっ、でちゃっ、うっ……」

自分でもびっくりするような大声に、湊は一瞬、我に返る。さすがにあまり大きな声を出したら、隣近所にばれてしまうかもしれない。
湊は左手を口元まで持ってゆき、ピンクの布を口にくわえた。ジャンパースカートは今までよりもさらに大きくまくれ上がる。空いた左手も、右手の上からペニスに添えて擦り上げる。
「んふっ、んふーっ……」
無我夢中でおのれの欲望をしごき上げる湊の脳裏に、ふと、大学で会う女子の顔が浮かんだ。
同期生の、佐倉春陽。
つねに穏やかな笑顔を絶やさない、名前の通り春の日差しのような印象の女子だ。人より目立つほっぺたのラインがチャームポイントで、いつも上品なワンピースやブラウスを着て、どこかの令嬢と言われてもうなずいてしまうような清楚な雰囲気がある。
「うぅ、は、春陽さんっ……！」
ふだんは「佐倉さん」と名字で呼んでいるのだが、妄想の中では、彼女を「春陽さん」と呼んでいた。いつか、名前で呼べる日を夢見て。
湊の腰が、大きく震えた。
（もしも春陽さんに、こんな場面を見られたら――）
いったい、どんな顔をするだろうか。
（この変態。近寄らないでくれる？）
軽蔑され、ぞっとするほど冷たい目で罵倒されるか。
（可愛い服着てるじゃない。お姉ちゃんがかわいがってあげよっか）
揶揄され、冷やかされながらいじめられるか。
春陽の上品な美貌が嘲笑に彩られ、ぞっとするほど冷たい視線を浴びせるところを想像すると、それだけで達してしまいそうになる。
「んっ、んっ……」
湊はいっそう激しく、先走りに濡れる雄をしごきあげた。裏筋に添えている人差し指が、ぬるぬるとした体液にぬめる。

くちゅっ、くちゅっ
ちゅくっ、ちゅくっ

嫌らしい音とともに、我慢の限界が近づいてくる。少しでも気を緩めると、暴発して射精してしまいそうだ。
このままだと、部屋中に飛び散ってしまう――こんな時だというのに妙に冷静な頭で、湊は考えた。
とっさに湊はショーツをずり下ろして脱ぎ、少女のために作られた肌着で、雄の象徴を包

み込んだ。
　そのまま指を動かすと、柔らかな肌触りが敏感になった亀頭に擦れ、昂奮が、一気に腰の奥からせり上がってくる。
　もはや、止まらない。
「んっ、んんーっ！」
　スカートの裾を噛む奥歯に、力がこもった。
　そしてとうとう――
「あ、ああ、あっ……」
　半開きになった口からスカートが落ちた瞬間、両手で握ったペニスの中に、熱いものが込み上げてきた。小水とは違う、どろどろとねばりつくような液体が、尿道の粘膜に絡みながらも通り抜けていく感覚は、網膜が白く染まるほど圧倒的な快感を伴っていた。
　そして勢いもそのままに、剛直の先端から白い噴泉が放出された。
「あっ、あああっ、あああああっ……」
　強烈な射精感に、虚ろな声が漏れる。
　大量の精液は、ペニスを包んでいる女児用ショーツに吸収されて行った。数日間溜まっていただけあって、性器の大きさからは不釣り合いなほど大量の白濁液が溢れ出し、ショーツにじわじわとしみだしてゆく。
「はっ、はぁっ、はぁっ……」
　精嚢がすっかり空になってしまうような射精に、湊はぶるっと全身を震わせた。
「はぁっ……気持ちよかった……」
　陶然とした表情で呟き、最後にペニスを根元から先端までを軽くしごいて、尿道に残っている精液を絞り出す。亀頭を包んでいるショーツを剥がして広げてみると、お姫様のプリントが、どろどろとした男の劣情に汚されていた。
「あちゃー……洗濯しないとなぁ」
　もうすっかり冷静になった頭で、湊はそう言った。精液が付着しないようにショーツを丸めて床に置き、改めて、鏡に映る自分を見る。
　レモン・イエローのブラウスに、ピンクのジャンパースカート。髪の毛をヘアゴムで括り、足元はレースのショーツを履いている。
（うぅっ、恥ずかしい格好）
　熱病にも似た昂奮が去ると、今の自分の格好が急にみっともなく見えてくる。もしも今ここで大地震か何かが起きて、外に避難しなければならないようなことになったら、いっそ建物の下敷きになって死んだほうがマシな恥をさらすことになるだろう――むろん、この姿を発見されるのも相当な辱めだが。
（は、早く着替えないと……）
　湊は急いで、着ているものを脱ぎ始めた。それらを洗濯機に放り込み、他にも引出しから取り出していた女児服をしまいなおすと、湊はユニットバスに向かった。

（疲れたし、今夜は早めに寝よう）
（たしか今週末は、サークルの飲み会だったっけ）
湊はバスタブでシャワーを浴びながら、予定を思い出す。それと同時に、さきほど妄想の中に登場した同期生のことも。
（春陽さんも、飲み会に来るんだよね。少しでも仲良くなれるといいんだけど）
（あんなことをしてるなんて春陽さんに知られたら、絶対軽蔑されるよね……）
先ほどの昂奮の残滓が、すっかりしぼんだペニスからこぼれる。
（春陽さんにだけは、絶対に知られないようにしないと……というか、そろそろ本当にやめないと、彼女の一人も作れやしない）
近いうちにあの服も、処分してしまわないと。結構なお金をつぎ込んだものを処分するのは惜しいが、ずっと続けるわけにもいかない。湊にだって、人並みに女子と仲良くなりたいという願望はある――彼女いない歴二〇年の湊にだって。
（でももしも、本当に知られたら――）
いったい、どんなことになってしまうのだろう。湊は悪夢のような想像に、秘かに身を震わせた。

（体験版は以上です。続きは製品版でお楽しみください）